

児童文化財の制作と公演を核とした創造的協同活動による 保育者・教員養成に関する一考察 —くらしき作陽大学子ども教育学部附属児童文化部ぱれっとの変遷と特徴—

A Study on Childcare Worker and Pre-service Teacher Training through Creative and Collaborative Activities with the Production and Performance of Children's Cultural Assets
- History and Characteristics of "Palette" affiliated with the Faculty of Childhood Education, Kurashiki Sakuyo University-

浅野 泰昌^{*1}・中野 広大^{*2}
ASANO Yasumasa・NAKANO Kodai

Abstract

In this article, I would like to summarize the activities and the history of "Palette" affiliated with the Faculty of Childhood Education, Kurashiki Sakuyo University, and discuss its characteristic. This is a part of a study on the educational relevance of childcare worker and pre-service teacher training through creative and cooperative activities with the production and performance of children's cultural assets. The five characteristics are as follows: (1) It is treated as an educational institution affiliated with the faculty and credited as a regular class subject. (2) It has an aspect of a theater company and managed autonomously through the collaboration of student members and a faculty advisor. (3) It also has an aspect as a club activity and allows students to learn independently by teaching each other with the instruction of a faculty advisor. (4) It produces and performs high quality children's cultural assets through highly professional instruction and continuous repetition of performances. (5) It puts an emphasis on outreach-based activities and contributes directly to local childcare support. It's necessary to report these features in more detail in the future.

Keywords: Children's cultural assets, Creative and cooperative activities, Student-teacher collaboration, Proactive, interactive and authentic learning

I. はじめに

子どもは将来を担う存在であり、その学びや育ちを支援する保育者・教員養成は、我々の恒久的な課題である。保育や教育及び周辺分野に関する専門性を備え、知識と技術及び専門職としての倫理を有し、理念によってそれらを統合する人材を育成することが重要である。実践力とそれを下支えする豊かな人間性を備えた保育者・教員養成を行うために、くらしき作陽大学子ども教育学部では、設置当初から、正課内外において様々な教育実践を展開している。そのひとつが「くらしき作陽大学子ども教育学部附属児童文化部ぱれっと」（以降、「ぱれっと」と表記する）による学生養成である。すなわち、学生と顧問教員の協働のもと、人形劇を中心とした児童文化財の制作を行い、学内外で公演を行う過程を通して、実践力と人間性に優れ、理念を有した保育者・教員を養成する取り組みである。

本稿は、児童文化財の制作と公演を核とした創造的協同活動による保育者・教員養成の教育的妥当性を明らかにする研究の一部であり、ぱれっとの活動概要と、その設立の経緯や活動の変遷をまとめ、その特徴を明らかにすると同時に、その意義について考察するものである。児童文化財を学生集団で

^{*1} 倉敷市立短期大学保育学科/専攻科（Kurashiki City College, The Department of Early Childhood Education and Care）

^{*2} くらしき作陽大学 子ども教育学部子ども教育学科（Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Childhood Education）

製作し、子どもを対象とした保育実技発表会を行い、この過程を通して保育者・教員養成に結びつける試みは一般的なものである。しかし、一連の営みを部活動・劇団活動として自律化し、継続的に行う事例は数少ない。学生が関わり合いながら相互に主体的に育ち合い、表現力や実践力と共に、それらを下支えする人間性を育むシステムとして部活動・劇団活動を捉え、その教育的妥当性を検証するための示唆を得ることを目的とする。

執筆にあたり、用語を統一する。保育・幼児教育は、保育所においては「保育士」が、認定こども園においては「保育教諭」が、そして幼稚園においては「教師」がその役割を担う。本論においては、保育士、保育教諭及び教師をまとめて「保育者」と表記する。また、本論においては、人形劇やパネルシアターなどの児童文化財を取り扱う。一般的に、芸術作品をつくることを「制作」、具体的に物を作る行為を「製作」と表記することが多い。児童文化財も芸術性を有するものであり、それをつくり出す過程は、企画立案、構成の検討、脚本の執筆、製作物のデザイン、材料・用具の調達、製作環境の準備、具体的製作、音響・照明等の検討、稽古（練習）、公演、評価と多岐にわたる。本論においては、児童文化財や上演に関わる道具・舞台等の具体物をつくることを「製作」と表記し、製作も含めた作品創造の全過程のことを「制作」と表記する。

Ⅱ. くらしき作陽大学子ども教育学部附属児童文化部ぱれっとの概要

ぱれっとは、くらしき作陽大学子ども教育学部が所管する教育機関であり、学部が設置された2008（平成20）年から活動を行っている。人形劇等を中心とした児童文化財を制作し、その公演を行う学生劇団であり、学年を越えた学生集団と顧問教員の協働によって組織運営を行う部活動の形態をとっている。2019（令和元）年度からは、専門科目「子ども文化理論演習」「子ども文化実践演習」として授業化・単位化されており、これらの科目を履修する部員学生は、その学習実態と成果によって単位を習得することが可能である。

ぱれっとの目的は次の2つである。一つは、児童文化財の公演を通して、地域の子育て支援に貢献することである。もう一つは、児童文化財の制作と公演を通して部員学生に創造的協同活動の機会を提供し、保育者・教員としての資質と能力を育成することである。このように地域貢献と学生養成を一体的に展開し、子ども教育学部の特色ある教育の一端を担っている。

ぱれっとの教育目標は、保育・教育に通じる実践力とともに、豊かな人間性と理念を有した子ども教育の専門家の養成である。この目標に基づき、児童文化財の制作と公演を主題として、部員学生が保育・教育に関する知識・技術を習得するだけでなく、それらを習得・指導する過程で、自らが学び育つ体験や教育する体験を得て、保育者・教員として求められる実践力や、豊かな人間性、そして保育や教育に関する理念を形成する機会を提供している。すなわち、学年を越えた学生集団によって、人形劇等の児童文化財の制作（企画・製作・稽古（練習）・公演・評価）を行う。そしてこの創造的協同活動の過程で、部員学生が相互に知識・技術を教え合い、経験を通して知識・技術を実践の知恵へと発展させ、保育・教育に通じる実践力を養う。同時に、他者と協働しながら制作や組織運営に取り組む過程で、部員学生の内面的成長を促し、実践力を統合・駆使するのに必要な理念を培うと同時に豊かな人間性を育む。このようにぱれっとは、表層の実践力と、これを深層で下支えする人間性の両面を、児童文化財の制作と公演の過程を通して部員学生に涵養するための取り組みを行っている。

以上のような目的と教育目標のもと、ぱれっとは、部活動の形態によって学生劇団活動を展開し、積極的なアウトリーチ（学外公演）によって学習成果を社会に還元しながら、地域の子育て支援に取り組み、その過程を通じた保育者・教員養成を行っている。2008（平成20）年8月30日から2022（令和4）年10月11日現在までの公演実績は605回を数え、その6割以上（378回）が学外公演である。精力的にアウトリーチを行い、地域の子育て支援・児童福祉・社会教育・学校教育等の現場に直接貢献している。

主な活動場所は、くらしき作陽大学11号館（音楽交流センター）である。学内で最も外輪にある本施設は、大学と周辺地域との境界にあり、アウトリーチの拠点として適した環境である。

学外公演は、原則として授業のない土日に行い、夏期・春期休業期間は平日にも実施する。その公演先は、保育所や障害者支援施設等の社会福祉施設、幼稚園・小学校・高等学校等の学校、図書館、公民館、ホール等である。大学事務局の協力のもと、顧問教員を窓口として、学外からの依頼を受け付け、これに応えている。

また、学内においても、大学と協力した公演を行っている。オープンキャンパスや大学見学会等の広報事業や、キッズキャンパス等の子育て支援事業・地域貢献事業における公演のほか、くらしき作陽大学附属認定こども園（2014（平成26）年度まではくらしき作陽大学附属幼稚園）や学内の地域子育て支援拠点等においても公演を行っている。

上記の学内外での公演のほかに、それに至る準備を行う定例活動を11号館において実施している。試験期間や各実習期間を除いて、毎週月曜日と水曜日の放課後の時間帯を利用し、①ミーティング、②基礎練習（ストレッチ・身体トレーニング・発声練習）、③製作基礎演習（月毎の壁面構成製作）、④作品制作（人形劇・パネルシアター等）、⑤作品稽古、⑥その他に取り組んでいる。運営にあたっては、部員学生の中から役員会を組織し、顧問教員との協議により運営方針と計画を立て、学生主体の活動を行っている。この定例活動に加えて、公演の直前には空きコマや土日、放課後に練習時間を適宜追加し、公演の質の保証に努め、地域の子育て支援の要請に応えている。

Ⅲ. くらしき作陽大学子ども教育学部附属児童文化部ぱれっとの設立の経緯と変遷

1. 設定期（2008年～2011年度）

（1）子ども教育学部の設置

2008（平成20）年4月、くらしき作陽大学に子ども教育学部は、岡山県津山市にあった作陽短期大学保育科を源流とする「伝統ある新学部」として設置された。保育士資格、幼稚園教諭一種免許状、小学校教諭一種免許状等の免許・資格に加え、2009（平成21）年度入学生からは特別支援学校教諭一種免許状の取得が可能となり、実践的保育者・教員の養成を行っている。音楽学部と食文化学部続く第三の学部として設置され、先行する両学部の資源を活用し、「音楽教育」「食育など食に関する教育」に力を入れるとともに、「心や人間性を重視した教育」「現場に強い子ども教育の専門家の養成」が標榜されていた。これらを実現するために、保育や教育はもとより、近接する様々な領域において、子どもの育ちや学びに関わる実践経験を有する教員が配された。その経験や実践知を基に、正課内外で様々な実践的教育の方法が模索されることとなる。

（2）キッズキャンパスの開催

作陽短期大学保育学科は、津山市内のホールにおいて、合奏や合唱、児童劇などの表現系発表会として「作陽こどもまつり」を実施していた。それを継承・発展させるものとして、新たに提案されたものが「キッズキャンパス」である。

新設された子ども教育学部と、音楽学部、食文化学部のそれぞれの特徴を活かした企画を行い、地域の家族連れを招待し、くらしき作陽大学の特色ある地域貢献活動を展開すると共に、学生養成に結びつけることを目的として2008（平成20）年から実施された。

この中で、子ども教育学部の特色を活かした企画として、学生による人形劇等の児童文化財の上演が考えられた。児童文化担当の教員からの呼びかけに応えた子ども教育学部の学生7名が、人形劇とパネルシアターの制作に取り組んだ。1か月の製作と練習期間を経て、2008年（平成20）8月30日に開催されたキッズキャンパスにおける上演がその後のぱれっとの先駆けとなる。ここに、学生と教員の協働による学生劇団・児童文化部構想の基盤が形成された。

なお、このキッズキャンパスの取り組みは、鑑賞型の内容だけでなく工作やスポーツなどの参加・体験型のプログラムが加わったり、有志の大学生だけでなく、高大連携事業の一環として連携協定を結んだ高等学校の高校生が参加したりするなど、多岐にわたる広がりを見せた。開催時期は、熱中症等が危惧される夏期から、気象の穏やかな秋期へと変更されたが、地域貢献と、これを通した学生の

学びの機会の創出に加え、子育て世帯を主とした地域住民への大学の広報や、高校生を対象とした学生募集など、多面的な役割を担うものとして定例化される。このように、「作陽こどもまつり」は、岡山県北部の津山市で開催されていた時とは異なる時代背景と社会的要請に応える行事として発展し、地域に根付いていくことになる。

（３）児童文化財の上演活動の継続と劇団設立の機運の高まり

児童文化財の制作と上演による学生の学びと育ちの機会を一過性のものとせず、継続的な学生養成と地域貢献の取り組みに発展させる構想は当初からなされていた。児童文化財の制作及び公演に関する専門性と経験を備えた教員の指導のもと、学生が主体となって自律的に活動し、学び合う共同体づくりが構想され、学生劇団・児童文化部の発足の具体化が推し進められた。その足がかりとして、更なる上演機会の提供が模索され、大学周辺地域の施設及び行事での上演が試みられた。

倉敷市立長尾小学校は、くらしき作陽大学に最も近い小学校である。長尾小学校では、当時、地域住民との交流の一環として、「地域の方とのふれあいの会」を開催していた。2008（平成20）年11月のふれあいの会において、くらしき作陽大学子ども教育学部の学生もいくつかの班に分かれて企画を用意し、児童との交流が図られた。このひとつとして、キッズキャンパスで上演した人形劇の再演が行われた。また、玉島地域の食生活改善に関する行事において、食文化学部の主導する食育ダンスの披露と併せて、人形劇を再演した。

このような子どもを前にした実践披露の機会は、保育・教育職を志望する学生が求めるものであり、子どもの好意的な反応は大きな手応えとなった。以上のような取り組みを通して、継続的な活動に向けた学生の意欲を喚起すると共に、趣旨や活動内容に共感する新たな学生の参加を募った。

（４）活動拠点の形成と組織としての設立

この活動を継続するためには、拠点が必要となる。学部教育と地域貢献及び広報活動に及ぼす成果を見込み、子ども教育学部長及び教務委員長の理解と大学事務局の協力により、活動スペースが用意されることとなった。これに加えて、作陽短期大学保育学科が所有していた舞台用照明機器が提供されると共に、新たに音響機器が用意され、児童文化財の制作と地域公演を主軸とした学生養成の取り組みが本格化する。

以上のような経過を経て、2008（平成20）年11月5日、参加する学生と児童文化担当教員の協議のうへ、学生の提案による複数の候補の中から通称「ぱれっと」が採択され、正式名称「くらしき作陽大学子ども教育学部附属児童文化部ぱれっと」を得て、組織として設立された。児童文化担当教員が顧問教員を務め、学部が所管する保育者・教員養成機関であるとともに大学及び学部名を冠した地域の子育て支援組織としての立場を明確に示しつつ、正式な活動が開始された。ただし、設立当初は、あくまでも正課外の活動であり、学内の任意団体としての発足であった。

（５）公演機会の増大と公演地域の拡大

ぱれっとは、大学の行事や、大学内や近隣地域の特定の場所に限り、定期的に公演をするだけでなく、地域からの要請に応え、積極的にアウトリーチ（学外公演）を行う方針がとられた。顧問教員が人形劇を中心とした児童文化財の地域公演に関する基礎的な知識と経験を有しており、学生の実態に合わせながら、ぱれっと独自のアウトリーチのスタイルを学生と共に構築していった。

さらに、設立当初は大学事務局の職員も同伴し、移動の補助や会場設営に携わるほか、学生の思いや考えを顧問教員とは異なる視点から引き出し、その活性化に貢献した。このように、学生と教職員の協働によって、学外公演を主軸とする劇団としての側面を色濃く押し出した取り組みが開始された。

しかし、アウトリーチを主とする学生劇団を標榜しても、即座に公演依頼が入ることはなく、設立当初は地元の子どもも関連施設の協力や、大学・学部関係者の縁故によって機会が確保されていた。

例えば、社会福祉法人倉敷市総合福祉事業団が管理・運営を所管する倉敷市内の各児童館は、公演

の受け皿として大きな役割を果たした。中でも、大学に最も近い倉敷市玉島児童館からは、設立2年目の2009（平成21）年度から継続して、一年に2回以上の公演機会の提供を受けている。

また、顧問教員がそれまでに公演を行っていた施設に依頼したり、子ども教育学部の実務家教員の繋がりの中で紹介された施設で公演したりするなかで、徐々に地域における評判が拡がり、外部からの依頼が増加していく。さらに、部員学生がボランティアやアルバイトを行っていた大学周辺地域の小学校の学童保育・放課後児童クラブで上演を行うなど、参加学生も主体的に自らの活動範囲を拡げていった。

このように、設立当初の2年間は、オープンキャンパスやキッズキャンパスなどの大学が提供する機会や学部教員が提供する公演において上演する場合が多数を占めていたが、3年目からは学外からの新規の公演依頼によって、参加学生がそれぞれ希望する十分な上演機会を確保することが可能となった。また、新規の公演依頼の他に、一度公演を行った依頼先から再演を求められる場合が多く、子どもだけでなく、行事を主催する大人からの要望が多いことが伺われ、大人の鑑賞に堪えうる作品づくりの成果が見られた。

以上のように、2008（平成20）年から2009（平成21）年にかけて、倉敷市内のくらしき作陽大学の周辺地域に根ざした公演のスタイルが確立された。当初は、地元の学校園や社会教育施設での上演が中心であった公演先は、徐々に拡がりを見せる。学外からの依頼は、倉敷市外からのものも増加し、主催者や対象も多岐にわたるようになる。公演依頼を受ける地域の広がりや再演依頼に対応するために、新たな作品制作が求められ、公演と作品制作の好循環により、学生には子どもを前にした実践披露と学習成果の発表の機会が与えられ、自己発揮・自己実現が図られるとともに、多面的な実践力の育成がなされた。

（6）公演の増加・多様化と学びの広がり

①県外における遠征公演の開始

設立2年目の2009（平成21）年度から、県外での公演が始まった。例えば、子ども教育学部からの要請により、中・四国保育士養成協議会が開催する「中・四国保育学生研究大会」に参加した。これは、中四国地方の保育士養成校が持ち回りで開催する研究発表会であり、ぱれっとは子ども教育学部からの要請に応え、学部教育の成果を発表する学生代表として実技発表を担当していくことになる。

また、財団法人とらまる人形劇研究所（現 一般財団法人とらまる人形劇研究所）が香川県東かがわ市から管理委託を受けていた人形劇の総合文化施設「とらまるパペットランド」内における上演を開始した。当施設は、人形劇の専門劇場「人形劇場とらまる座」や、小型舞台を備えた人形劇の体験型博物館「とらまる人形劇ミュージアム」、さらに屋内遊戯場などを擁し、人形劇を核とした文化芸術振興や地域創生に総合的に取り組んでいる。日本においては希少な子どもとその関係者を対象とした専門劇場であり、西日本で最大の稼働率を誇り、週末には人形劇の定期公演が開催されている。そして、ぱれっとは、年度末に開催される春期連続公演「春休みパペットフェスタ」の一端を担当していくことになる。

このようにぱれっとの遠征公演の基盤は2009（平成21）年に形成された。これを皮切りに、後述のように、卒業生の所属する学校園・保育所等における芸術鑑賞等の行事、各地で開催される国民文化祭や地域子育て支援事業、「いいだ人形劇フェスタ」「松江・森の演劇祭」と言った国際的演劇祭等に招聘され、これに応える県外遠征公演が実施されるようになる。これらの県外遠征公演は、2020（令和2）年初頭に新型コロナウイルス感染症の世界的流行により県境を越える移動や対面型の行事開催が困難となるまで継続される。

②大学・学部事業への協力の多様化

他方、学内での活動も拡大していく。設立当初から、大学及び学部の特色ある教育の一環として高校生を対象としたオープンキャンパスにおける上演を行っていたが、2009（平成21）年度からは司会進行や学内誘導、高校生個別対応などの補助的業務を担当するようになる。

このほか、食文化学部的主导によって制作された食育普及ソング「食育コマまわし」のPR活動、子ども研究センター（現 子ども教育研究センター）のシンポジウムにおける素材上演などの各種事業への協力、初年次教育科目「アセンブリー・アワー」や大学間連携事業「岡山オルガノン」等における素材上演など、学校法人作陽学園からの協力要請に対して積極的に応えた。

また、2010（平成22）年からは、倉敷歯科医師会と食文化学部との協働により、歯と口の健康に関する啓蒙劇『カムンジャー』を制作・上演した。これは、倉敷歯科医師会が「歯の衛生週間」（現「歯と口の健康週間」）に開催していた「歯の健康フェア」における子ども向け作品の共同制作である。歯科医師会から提示された原案をもとに、食文化学部の担当教員による監修を受けながら上演台本を作成し、作中の舞台道具一式を製作し、出演を担当したほか、各種報道媒体への出演を通して広報に協力し、行事の成功に貢献した。この取り組みは2016（平成28）年まで継続され、通算6作品のシリーズへと発展した。

③倉敷市内における公演の多様化

児童館や保育所、幼稚園、学童保育・放課後児童クラブなどで行われていた倉敷市内における地域に根ざした公演も、さらに多様化した。特に顕著であったのは、上演対象の子どもの低年齢化である。子育て支援センターや地域の公民館などで開催される未就園児と保護者向けの公演が増加し、それに対応した演目の用意が課題となった。

また、山陽新聞が主催する子育て支援事業「おぎゃっと21」などの商業施設等で開催される不特定多数の観客を対象としたイベントへの出演も試みられた。

加えて、倉敷市及び関連団体との連携や協働事業も開始された。倉敷市内の大学及び短期大学と倉敷市が委員会を組織して実施する「倉敷市大学連携福祉事業」を担当し、児童文化財の上演という形で、倉敷市と連携して地域福祉の増進に努めた。当初は、真備地域の「倉敷市真備健康福祉館まびいきいきプラザ」を拠点として、地域の子育て世帯を主な対象とした福祉事業を展開していたが、徐々に真備地域の保育所での上演を加えるなど、その範囲を拡大していった。

以上のように、状況や実態が相違する公演において、多様な観客を対象として公演を行い、必要な児童文化財を製作し、練習し、本番を経て改善を重ねる中で、顧問教員による指導と共に学生相互の指導体制が確立し、作品の質的向上と同時に、組織としての成長が見られた。劇団としての側面の充実に加えて、「教えることで学ぶ」ことを重視した部活動としての側面が有効に機能し始めた。

④他大学の児童文化部との連携

部活動としての学びのあり方を追究するために、岡山県内で児童文化財の制作と公演を行っている学生組織との連携を図った。岡山大学の「岡山大学児童文化部」や、倉敷市立短期大学の「倉敷市立短大子どもの劇場」など、先行する学生劇団・児童文化部として歴史と実績を有する組織との試演会を行い、それぞれの理念や表現を学び合うとともに課題を明確化した。特に、倉敷市立短大子どもの劇場とは2010（平成22）年から継続的に試演会を重ね、2016（平成28）年からは早島町教育委員会主催事業において合同公演を行うに至った。

⑤専門人形劇場における合宿研修の開始

設立2年目の2009（平成21）年から、財団法人とらまる人形劇研究所（現 一般社団法人とらまる人形劇研究所）の協力により、人形劇の専門施設での上演を重ねると共に、専門家からの指導を受け、活動の質的向上を試みている。また、専門人形劇団による作品の鑑賞や、その舞台裏の見学、質疑応答などの機会を設け、作品の質的向上に結び付けている。専門劇団の姿や作品に触れることは作品創作の源泉になることも多く、また子どもと文化芸術の繋がりに関する学びを得たり、その出逢いをもたらし保育者・教員の役割を考えたりする機会にもなっている。

設立3年目の2010（平成22）年からは、施設に併設するキャンプ場ロッジを利用した合宿研修へと発展し、人形劇場での上演と専門家からの指導・助言を受けると同時に、参加学生の親睦を深める機会となった。児童文化財の制作と上演場面だけでなく、日常的な生活場面の中の何気ないやりとりを通して構築された人間関係が、一層の信頼関係や一体感を醸成し、結果として作品の質的向上を目

指す主活動を下支えした。ここに、学びと育ちの共同体としての部活動の意義を見出すことができる。

さらに、この人形劇場とらまる座での上演の場において、人形劇団及び学生人形劇団に関する全国的な動向を把握している関係者から、ぱれっとの活動内容とその作品を広く発信することを提案され、人形劇の全国的な祭典への上演参加を目指すことになる。

（７）完成年度における定期公演の開催と定例化

2011（平成23）年、子ども教育学部に第4期生が入学し、完成年度を迎えた。ぱれっとも、全学年が揃い、初めての卒業生を輩出することになる。これに併せて、卒業公演を兼ねた年度末発表の機会を設定し、2012（平成24）年3月に「第1回ぱれっと定期公演」を開催した。以降、倉敷市及び倉敷市教育委員会の後援を受けながら、卒業公演と年度末成果発表会として定期公演を毎年度末に開催し、一般市民のほか、保護者や大学教職員を招待し、学生の学びと育ちの発信を行うことになる。

ぱれっと第1生の進路は、保育所保育士・幼稚園教諭・小学校教諭としての就職や、大学院進学など多岐にわたった。保育士（3名）や小学校教諭（2名）など、公務員としての就職の割合も一定のものがあ（50%）、その傾向は現在も続いている。

2. 展開期（2012年～2019年度）

（１）全国規模の行事における公演の開始

地域に根ざした公演に加えて、県外の行事における上演も貴重な学びの機会である。ぱれっとは、学外からの要請に応えたり、自ら申請したりすることで、積極的に全国規模の公演に参加した。

長野県飯田市は、人形劇による街づくりを行っており、学校教育や社会教育にも人形劇を取り入れたり、専門劇場を拠点とした上演事業を行ったりするなど、総合的な取り組みを展開している日本の人形劇文化の中心地である。その中核を担っているのが国際児童演劇祭「いいだ人形劇フェスタ」である。これは、日本最大規模の人形劇の祭典であり、国内外からプロ・アマを問わず劇団が集まり、市内全域において連続公演を行うものである。2012（平成24）年8月、ぱれっとは専門劇団からの促しを受け、いいだ人形劇フェスタに初めて参加した。上演を担ったのは第3期生であり、顧問教員のほか、卒業生や第4期生、学部教員も引率に加わって公演を行った。以降、いいだ人形劇フェスタへの参加は、3年次の中間成果発表の機会として位置づけられ、定期的な参加を行うようになる。上演に加えて、国内外の専門劇団による人形劇作品を鑑賞する機会を得て、3年次の新作制作に向けた意欲を高めることができた。

また、2012（平成24）年度は、徳島県で開催された国民文化祭における「まつしげ人形劇フェスティバル」に上演参加した。これらの通常とは異なる特別な状況での上演は、参加学生に大きな達成感を与え、質的向上への意欲を一層高めた。

さらに、その姿は後輩学生の意識にも変化をもたらし、「いいだ人形劇フェスタ」をはじめとした各行事への参加は、各学年の目標・伝統となり、新型コロナウイルス感染症の世界的流行によって中断される前の2019年（令和元）年度まで継続することになる。国民文化祭についても、徳島県大会（2012年）に続き、専門人形劇団からの招聘を受け、岡山県及び倉敷市による助成を得て、愛知県大会「北なごやパペットフェスタ」（2016年）に参加した。

（２）大学附属幼年教育施設における定期的な公演の開始

2013（平成25）年4月、子ども教育学部は新学部長を迎えると同時に学科再編を行い、子ども教育学科に「小学校・特別支援学校コース」と「保育園・幼稚園コース」を設置した。そして、「作陽ブランド」の確立を目指し、特色ある教育として「特別支援教育」と「学部附属児童文化部活動」を挙げた¹⁾。

また、同年4月に、「くらしき作陽大学附属幼稚園」が設置され、大学に併設する幼稚園として各

学部の特徴を活かした教育内容を特色のひとつとして挙げた。ぱれっとは、附属幼稚園における定期的な人形劇上演を担当し、幼児の情操教育の一端を担っている。2014（平成26）年には園内に地域子育て支援拠点「さくよう森のひろば『どんぐりっこ』」が開設され、ぱれっとはここでも、人形劇やその他の児童文化財の上演を行った。

さらに、2015（平成27）年に、幼稚園から「くらしき作陽大学附属認定こども園」に移行した後も、定期的な上演を継続し、現在に至っている。また、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により、公演活動の中止を余儀なくされたが、附属認定こども園においては、状況が許す範囲での人形劇等の上演に加え、各クラス（乳児クラスを除く）における絵本の読み聞かせの機会の提供を受けることができた。

（3）大学COC事業への参画と乳児向け舞台芸術の本格的な着手

2014（平成26）年、くらしき作陽大学は、倉敷市及び学校法人加計学園倉敷芸術科学大学と連携し、文部科学省「平成26年度『地（知）の拠点整備事業』（大学COC事業）」に共同申請し、採択された。これは、自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を支援することで、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的としたものである。

ぱれっとは、地域課題に応えるための教育と研究及び社会貢献に取り組む担当として大学COC事業の一端を担うこととなる。具体的には、「倉敷アートスタート研究」を担当し、乳児向け舞台芸術を通じた地域貢献と、これによる保育者・教員養成の取り組みを行った。未就園児に対する公演依頼の増加を受け、ぱれっとは既に2013（平成25）年度に乳幼児を対象とした非言語的表現による人形劇を制作しており、それを発展させ、教育と研究に結び付けながら、大学・学部の事業推進に貢献した。乳児向け舞台芸術は、1980年代に西欧で始まり、日本で最初の制作がなされたのは1990年代中頃である。その後、緩やかに発展し、関東、山陰、九州などのいくつかの地域で社会福祉と一体的な取り組みが開始されたのが2000年代初頭である。その後、日本各地で実践が積み重ねられ、2015（平成27）年に、乳児向け舞台芸術に取り組む創造団体や子育て支援団体及び地域文化振興団体が、組織的な事業を立ち上げるに至る。顧問教員はその設立メンバーとして事業に参画しており、大学COC事業におけるぱれっとの取り組みは、国内外の乳児向け舞台芸術における先駆的な創造団体から専門的な知識の提供を受けることができた。

具体的には、乳児向け舞台芸術『みずのなかのたまべえ』を制作し、倉敷市内の乳児と保護者に上演し、その成果の検証を試みた。「たまべえ」は玉島商工会議所が倉敷市玉島地区の地域振興のために考案したおたまじゃくしのマスコットキャラクターであり、商工会議所青年部の要請によって、キャラクターの活かし方を検討するうちに、人形劇化へと結びつき、地域連携の象徴となった。

この作品の公演に際して、上演機会の提供と環境構成及び被験児の募集を担ったのが、公益財団法人倉敷市文化振興財団（アルスクらしき）である。当財団は、倉敷市からの業務委託を受けて文化振興を担い各種事業を展開している。ぱれっとは、倉敷アートスタート研究を推進するにあたり、共同研究組織として素材上演の機会の提供や参加家族の募集など多面的な支援を受けた。さらに、財団が倉敷市と共に主催する「アルスクらしき親子劇場」の実施にあたって上演を担当し、財団の主導する倉敷市の文化振興事業のうち、子どもや保護者を対象としたものを担うに至った。これは新型コロナウイルス感染症の世界的な流行が見られる2021（令和3）年度まで継続された。

（4）文化庁による派遣と国際演劇祭等への招聘

ぱれっとは、これまでの実績によって、文化庁による派遣や国際演劇祭への招聘参加など、専門劇団が担当する内容の事業を担うようになる。

①文化庁「文化芸術による子供の育成事業（芸術家の派遣事業）」への派遣

前述の通り、長野県飯田市は、その街作りの中核のひとつとして人形劇を位置づけており、社会教

育・学校教育において人形劇が取り入れられている。中でも、飯田市立丸山小学校は伝統的な児童人形劇団（人形劇クラブ）が現存する唯一の小学校であり、いいだ人形劇フェスタをはじめとした各種行事での上演を継続している。2013（平成25）年4月、ぱれっとの卒業生が新規採用教員として丸山小学校に着任し、児童人形劇団の顧問として指導・引率等を担うことになる。そして、2016（平成28）・2017（平成29）年、ぱれっとは顧問教員とともに、文化庁「文化芸術による子供の育成事業（芸術家の派遣事業）」の担当劇団として丸山小学校に派遣された。児童劇団との交流試演会を開催し、相互の表現から学び合う貴重な機会から、子どもと児童文化財の関わりに関する知見を深めた。

②国際演劇祭等への招聘参加

「松江・森の演劇祭」は、鳥根県松江市にある公立演劇専用劇場「しいの実シアター」を拠点として開催される国際演劇祭である。国内外の優れた創造団体を招聘し、劇場及び周辺施設で文化芸術による地域振興を展開している。ぱれっとは、国内の専門人形劇団による推薦を得て、2016（平成28）年9月のプレ公演「森の小さな演劇祭」と2017（平成29）年の本公演「松江・森の演劇祭」に招聘された。プレ公演における地域住民の評価と再演を求める要望に実行委員会が応えたものであり、国内外の専門劇団とともに国際演劇祭の一翼を担った。

この他、福岡県人形劇協議会からの要請を受け、福岡県筑紫野市で開催される「ちくしの人形劇祭」に参加し、地域の子どもの上演すると同時に、所属劇団の研修における素材上演を担当した。

（5）学習成果の地域への還元

以上のように、第1期生を輩出して以降、2012（平成24）年からは、学内外での活動は質量ともに増大し、活動による学びも多岐にわたるものとなった。保育・教育の現場に就職し、保育者・教員として勤務する卒業生からの依頼に応え、岡山県岡山市（2015～2017）、愛媛県喜多郡内子町（2016）、岡山県倉敷市（2018～2022）、香川県木田郡三木町（2019）、長野県木曽郡大桑村（2020）などでの公演を行った。また、卒業生からの依頼に応じて、大学近隣の倉敷市立乙島小学校における読み聞かせボランティア活動も2020（令和2）年以降継続している。

このように大学周辺の地域に根ざした公演を行いながら、市外・県内外での公演や遠征を行い、同時に大学COC事業の倉敷アートスタート研究において乳児向け舞台芸術の研究と作品制作に取り組んだ。これらに加えて、文化庁派遣を受けたり国際演劇祭に招聘されたりするなど、ぱれっとは充実した期間を迎えた。これに併せて、大学COC事業の一環として、ぱれっとの取り組みの成果を地域に還元するためのシンポジウムや記念公演等が開催された。先ず2017（平成29）年に、人形劇を通じた次世代育成について、小学生劇団・中高生劇団・大学生劇団のそれぞれの視点から、その成果と課題を問うシンポジウムが開催された。次に2018（平成30）年に、「設立10周年記念公演」が開催されると同時に、岡山県内外の保育所、幼稚園、小学校及び特別支援学校で保育者・教員として勤務する卒業生を招き、それぞれの保育・教育実践やそれらを下支えするぱれっとでの学びの成果を報告するシンポジウムが開催された。

2018（平成30）年7月、「平成30年西日本豪雨」が発生し、倉敷市は甚大な被害を受けた。ぱれっとが毎年上演を行っていた保育所や社会福祉施設も被災し、例年通りの公演を行うことはできなかった。その後、倉敷市まきびの里保育園は仮設園舎での保育を再開し、ぱれっとは倉敷市大学連携福祉事業の一環として復興支援の公演を実施した。

2019（令和元）年4月から、ぱれっとの部員学生が履修可能な専門科目「子ども文化理論演習」「子ども文化実践演習」が開講され、ぱれっとは授業化・単位化された。

さらに2019（令和元）年11月、顧問教員が「第1回福武教育文化賞」を受賞した。これは1987（昭和62）年から続く「教育賞」と、2000（平成12）年から続く「文化賞」が統合されたもので、岡山県の教育及び文化の向上に貢献している個人及び団体を顕彰することを目的とする。顧問教員の受賞理由は、「乳児向け舞台芸術の研究と実践及び学生劇団指導による岡山県内の情操教育の実績と今後への期待」であり、これはくらしき作陽大学子ども教育学部附属児童文化部ぱれっとの活動に対する外

部評価の現れのひとつであると言える。

3. 新型コロナウイルス感染症の世界的流行下における活動継続期（2020～2021年度）

（1）新型コロナウイルス感染症の世界的流行の始まりと対応

2020（令和2）年の年明けから新型コロナウイルス感染症の世界的流行が始まった。ぱれっとは春期休業期間を利用した連続公演を開始していたが、日本国内でも流行の急拡大が見られるようになり、その対応を迫られた。そして、2020年2月末の長野県木曽郡の大桑村立大桑小学校における2年生学級との相互上演交流会を最後に、予定されていた公演の中止を余儀なくされ、年度末の定期公演（卒業公演）も関係者のみの学内上演に切り替えることとなった。

密閉・密集・密接状態を避けて感染症対策を徹底すべき状況にあつて、他者と関わりながら作品の制作や練習に取り組み、その成果を直接子どもたちに届ける活動を主軸とするぱれっとは、その活動のやり方の大部分を変更する必要に迫られた。公演はもとより、練習場所に集まって活動を行うこと自体に制限が課されることとなり、遠隔会議システムを使用したオンライン活動を行うことにより、辛うじて、関係性の構築・深化や、実践力・表現力の育成を継続させた。

感染症の流行は拡大と一時的な収束を繰り返し、その波が収まる時期で、倉敷市や大学の方針に則って活動が認められた場合に限り、感染症対策を行いながら、対面型による活動や学外公演を再開した。例年50～60回の公演実績があったが、新型コロナウイルスの世界的な流行が始まった2020（令和2）年度は17回、2021（令和3）年度は25回にとどまった。

遠征公演についても、乳幼児向け舞台芸術を通した子育て支援に取り組む広島県三次市や、国内でいち早く乳児向け舞台芸術に取り組んでいた地域のひとつである鳥取県境港市など、複数の依頼を受け上演を試みたが断念せざるを得なかった。いいだ人形劇フェスタや春休みとらまるパペットフェスタなど、例年参加していた行事も相次いで中止となり、合宿研修を兼ねていた上演機会も次々と失われた。

この状況であっても、大学周辺地域において子どもたちを前にして学習成果を発表する学外公演の機会をわずかでも設けることができたのは、地域の子育て支援団体等の理解と協力の御蔭であり、卒業生を含めたぱれっと部員のこれまでの真摯な取り組みの成果と言えよう。2020（令和2）年度及び2021（令和3）年度末の定期公演（卒業公演）は、オンライン配信と関係者限定の対面型上演の両面で実施した。

（2）社会情勢に応じた活動の継続と新たな顧問教員の就任

2022（令和4）年3月末をもって、2008（平成20）年から14年間、ぱれっとの初代顧問を務めた教員が退任し、それに伴って2022（令和4）年4月から新たな顧問教員が着任した。人形劇の制作・上演経験を有すると同時に、学校教育及び社会教育の現場で、子どもや保護者と関わり、地域の教育・福祉に携わってきた新しい顧問教員の指導のもと、新体制のぱれっとが歩みを始めた。

新型コロナウイルスの世界的な流行は依然として続いており、完全な終息は未だ見通せないが、感染症に対する社会の捉え方は変化し、必要な対策を講じつつも行き過ぎたものは緩和され、徐々に活動制限が解除されている。公演依頼もコロナ禍以前の水準に戻り、ぱれっとの公演を年間行事としていた諸団体へのアウトリーチも復調している。セリフを発したり、短時間ながら近接して演技を行ったりするなど、制限下では上演が難しかった演目の再演にも着手し、以前のように学生の実態に合わせた多様な表現経験を提供することができるようになった。幼児・児童とともに人形劇等の児童文化財を制作・上演を行い、実務家教員としての教育経験を有する新しい顧問教員の指導のもとに活動が行われ、新たな作品創作も開始されている。2022（令和4）年7月14日には、600回の節目の公演を倉敷市玉島児童館で開催した。コロナ禍は、ぱれっとの独自性や意義を鮮明にすると同時に、その課題も浮き彫りにした。感染症の流行に限らず、時代や社会は新たな要請を投げかけてくると考えられ

るが、それに応える新体制下でのぱれっとの活動が期待される。

Ⅳ. くらしき作陽大学子ども教育学部附属児童文化部ぱれっとの特徴

1. 協働性や実践力の育成を通じた学部教育への貢献

ぱれっとはアウトリーチを主体とした劇団活動を展開し、地域の子育て支援に直接貢献すると同時に、その過程に参画する学生の実践力と人間性を高め、保育者・教員としての資質と能力の向上を目指している。

教師に求められる資質能力については、これまでの中央教育審議会における答申の中でも、「使命感や責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力、コミュニケーション能力等」が挙げられており、令和3年答申において、「ファシリテーション能力、ICT活用指導力等」が加えられた。児童の集団的な学びをもたらし存在であると同時に、教師自身もまた、教育の営みのなかで他者と共に連携と協働を求められる。「質の高い教職員集団」が求められる昨今において、教師自身の協働性の育成は必要不可欠である。

また、「令和の日本型学校教育」の姿として、第一に「個別最適な学び」が示される。これは、「個に応じた支援」（指導の個別化と学習の個別化）を学習者の視点から整理した概念である。そして、学びに参加する子どものそれぞれの学びを一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す過程で重要視されるのが、第二の姿である「協働的な学び」である。個に応じつつ、それぞれの気づきや学びを結びつけ、協働的な学びへと発展させていく学習の在り方を実現するのが、これからの教師の役割である。探求的な学習や体験活動を通じ、子ども同士や多様な他者と協働を通して、社会的な存在としての成長を促すにあたり、まずは教師自身の協働性が問われると言えよう。

これに対し、ぱれっとは、児童文化財の制作と公演を学生集団（劇団・部活動）によって行う創造的協同活動をその基盤として、学生の社会性を高め、協働性を培う教育実践を重ねている。作品の制作過程はもとより、年間50～60回程度の公演を行っていくためには、高度な協働性が必要とされる。計画の作成、分掌の立案、具体的な施行と評価、次年度以降を見据えた継承など、児童文化財の制作と公演を方法として部員学生が経験する学びは、実践力だけでなく、その協働性を高めるものと考えられる。

ぱれっとに限らずくらしき作陽大学子ども教育学部では、学生集団の協働による保育者・教員養成を行っている。2010（平成22）年度からは特別支援教育（橋本・永井・銀屋・渡邊・松田，2018）、2014（平成26）年度からは個別学習支援を主題とした協働的な学びの場が設けられた。専門性に関する学びにとどまらず、学生と教員による協働的な学びは、子ども教育学部の正課内外の教育的達成を下支えしている。

2011（平成23）年度に初めての卒業生を送り出して以来、ぱれっとは133人の卒業生を送り出している。そのうちの123名が、保育者・教員・施設職員である。その内訳は、民間の幼児教育施設（保育所・認定こども園・幼稚園）保育者58名、公立の幼児教育施設（保育所・認定こども園・幼稚園）保育者33名、そして小学校教諭は27名である。また、障害者支援施設及び放課後児童クラブ等の施設職員は4名である（ただし、卒業時の就職先）。123名の保育者・教員・施設職員のうち、公立の幼児教育施設及び学校に就職を果たした卒業生は60名である。

ぱれっとの独自性の高い保育者・教員養成は、普遍性を備えつつ、時代の趨勢に適合したものであり、子ども教育学部における保育者・教員養成の一角を担い、その教育に貢献している。

2. 学生劇団及び部活動としての組織運営及び教育の展開

佐伯（2007）は、ヴィゴツキーの提唱する「発達の最近接領域（Zone of Proximal Development）」について、「人は一人でできる知的活動領域と他者と共にできる活動領域があり、一般的には後者の方がより大きく広がりがある」と述べ、その差のことを最近接発達領域と表現し、人が発達する場であるとした。このように教育や保育の営みは、個人が他者と共にある場において展開される。ぱれっ

とにおいても、部員学生が多様な他者との関わりの中で相互に影響を及ぼし合い、経験知や実践知を集合知として共有し、個人では得られない気づきや学びや育ちを得ることを企図している。そのため、ぱれっとは、授業化・単位化されている一方で、学部の特徴ある教育の一環として、通常の授業の枠組みに収まらない実践的な学習の共同体としての次に述べる側面を有している。

（１）学生劇団としての側面

第一に、学生劇団という側面である。ぱれっとにおいては、顧問教員の指導・監修のもと、人形劇やパネルシアターを中心とした児童文化財の作品を制作し、稽古（練習）し、現場に出向いて公演という形で学習成果を社会に還元する。2008（平成20）年8月30日から2022（令和4）年10月11日現在までの公演実績は605回を数え、その6割以上（378回）が学外公演である。精力的なアウトリーチを展開し、地域の子育て支援・児童福祉・社会教育・学校教育等に直接貢献している。学外公演を主としながら年間50～60回の公演を行う学生劇団は希少である。

学外公演を主体とすることは容易ではない。会場毎に異なる環境に対応して舞台等を設置し、公演を行うことは必然的に部員学生の実践力や協働性を高めた。毎回が同じ準備を行うわけではなく、その場と対象に相応しい演目や環境構成を検討・立案し、実践していく文化がぱれっと内に形成され、共通の文脈のなかで思考と実践を重ねる中で、学生劇団としての強い一体感が醸成された。毎回役割分担やタイムスケジュールを決めるのではなく、どの公演にも通底する準備と全体像や進行の仕方、分掌のあり方を踏まえて、各自が必要に応じて判断し、実行することで、限られた時間での公演準備を達成していくことができた。

学外公演を行うことは、多様な公演依頼に応えることである。乳児・未就園児から、幼児、児童、高校生、大人まで幅広い対象の観客に対する公演を企画・実施することは、ぱれっとの組織としての実践力を高め、それに参加する部員学生の表現力を高めると共に、経験知の蓄積につながった。これは発達過程の違いに応じた多様性の学習だけにとどまらない。例えば、子どもだけの公演と、子どもが保護者と共に鑑賞する公演では、同じ演目でも求められる表現が異なる。学校園という親しみのあるクラスメイトが集まる公演と不特定多数が集まる公演でも求められる配慮事項が異なる。多数の公演をこなしてくなかで、それらに即応する実践知が形成された。

また、多様な対象の公演に応えることで、レパートリーが多様化し、表現の幅が拡大された。それに応じて得られる学生の学びも深まることになる。例えば、設立当初は、幼児及び児童を対象とした公演を多く見込んで作品制作が行われた。しかし、この想定に反して、乳児や未就園児とその保護者を対象とした公演が増加していく。子育て支援の要請に応えるために、言語的な表現や刺激の強い表現を抑えた作品が必要となり、人形と演者による表現と音楽のみで構成された非言語的・前言語的表現を取り入れた作品を複数制作して要望に応えた。中でも、2013（平成25）年に初めて制作した人形劇『おすわりくまちゃん』は、地域の子育て支援団体だけでなく専門劇団からも高い評価を得て、岡山県内外の行事だけでなく、ノンバーバル作品として国際演劇祭における上演に結びついた。これらの実績から、児童向けにもノンバーバル作品を制作したり、前述の大学COC事業「倉敷アートスタート研究」に見られるような乳児向け舞台芸術の研究と実践を試みたりと取り組みの発展がもたらされた。

以上のような深まりは、作品制作と公演を活動の主軸に据えた成果であり、副次的に学生の表現力を高めることに繋がった。これは学生劇団としての側面の独自性や有用性を示すものである。

（２）部活動としての側面

第二に、部活動という側面である。ぱれっとは、児童文化部という名称の通り、学年を越えた学生組織による主体的な活動を展開している。顧問教員の指導・助言のもと、上級生が運営を担い、児童文化財の制作・練習や、公演の企画・立案・実施等の様々な場面で下級生を主導する。「教えることで学ぶ」を標語として、教わる側はもとより教える側の学生も、指導（教育）対象の理解に努め、最

適な教示のあり方を模索・検討・実践・反省し、これを通して自らの能力の向上に繋げている。

前述した通り、精力的な学生劇団活動を行う過程で得られた実践知は、部活動という形態の中で、上級生から下級生へと継承され、錬磨され、向上していくことが可能となった。

また部活動として、学生主体の役員会による主体的な組織運営もまた、参加学生の責任と自覚、そして帰属意識を高め、協働を促し、彼らの協働性を高める役割を果たした。

上級生が下級生を指導するなかで、相互に学びを深める営みが部活動の要諦である。ぱれっとにおいても同様であり、児童文化財の制作や上演（表現）に関する指導を通して、上級生から下級生へ知識や技術及び経験知の伝達が行われた。ぱれっとにおいては、知識や技術の教授と習得にとどまらず、その行為自体から「教えること」「教えることを通じて教育・指導する側が学ぶこと」を学ぶことにも着目した。部員学生は、児童文化財の稽古を通して、自身の表現を振り返り、その要点を明確にし、それを伝えるための具体的方法を検討し、言動をもって指導にあたる。指導する対象への理解を深め、実態に応じた指導を模索する。これらを通して、自分自身の表現が錬磨され、教育・指導の相互性を感得する。「教えることで学ぶ」ことを体現する教育の仕組みのひとつが部活動であり、ぱれっとは、授業の枠を越えて、部活動という学生集団による学びをその特徴としている。これは、個別最適な学びと協働的な学びを具現化するものとも言えるだろう。

（３）実践知に基づき現場実践に根ざした専門性の高い指導

以上のような活動を行うには、専門性の高い指導が必要となる。ぱれっとの初代顧問教員は、自身も学生時代に大学の児童文化部に所属し、学生としての地域公演の経験を有している。また、財団法人とらまる人形劇研究所附属人形劇学校パペットアークに進学すると共に、人形劇に関する総合文化施設での勤務経験と、人形劇学校附属人形劇団における作品制作と公演の実績を有している。全国的に活躍する専門人形劇団及び児童文化関係者との繋がりを活かして、専門的な指導・助言を適宜受けながら、ぱれっとの運営と教育に反映することが可能であった。これらは、アウトリーチを主体とした学生劇団を部活動の形態で実施し、保育者・教員養成に繋げるぱれっとの基盤構築に一定の役割を果たした。２代目顧問教員も同様に、学生時代に児童文化部に所属し、地域公演の経験を有している。さらに、小学校教諭及び児童会館（児童館）職員として、学教教育、社会教育及び社会福祉の現場で子どもや保護者と関わり、関係者との連携と協働に深く携わってきた。それまでのぱれっとの教育的活動に加えて、教育・保育・福祉の視点に立った指導が導入されることにより、部員学生の実態に適合し、主体的な育ちや学びがもたらされる実践への発展が期待される。白井ら（2016）は、部活動に関して、運動部の生徒の意欲や自主性を生み出す有効的な指導方法に焦点をあてて論じ、指導者による恣意的で管見な経験論から脱却し、生徒の自律性支援行動を促すための学術的理論に根差したコーチングへの転換の必要性を述べた。ぱれっとの指導においても、子どもの前に立つ保育者・教員の養成の組織であることに立脚し、どのような指導のあり方が時代の要請に応え、かつ学生の実態に適合するかを検討し、向上と変革に努める必要があるだろう。

3. アウトリーチを主体とした地域貢献活動の展開と保育者・教員養成の一体的展開

児童文化財の上演を主とする学生団体は多数ある。その上演先は、学内と学外に大別される。例えば、大学内の体育館や上演ホール等に定期的に家族連れを招いて上演する団体などがある。これは大学が所在する地域を中心として、子育て支援の拠点を形成することにつながる。他方、学外で公演を行う場合は、特定の場所で定期的な公演を行う場合と、不特定の場所で随時公演を行う場合に分かれる。前者の一例として、大学の所在する地域や近隣の地域などで定期的な公演を行う。作陽短期大学保育学科が行っていた「作陽こどもまつり」もこれにあたる。

ぱれっとは、前者のように学内での公演や特定の場所での定期的な公演に加えて、不特定の場所で随時公演を行っている。つまり、児童文化財の公演を求める地域からの出張依頼に対して、可能な限り要望に応え、積極的に学外上演を行う劇団の側面を強く押し出した。毎回異なる会場での上演は、

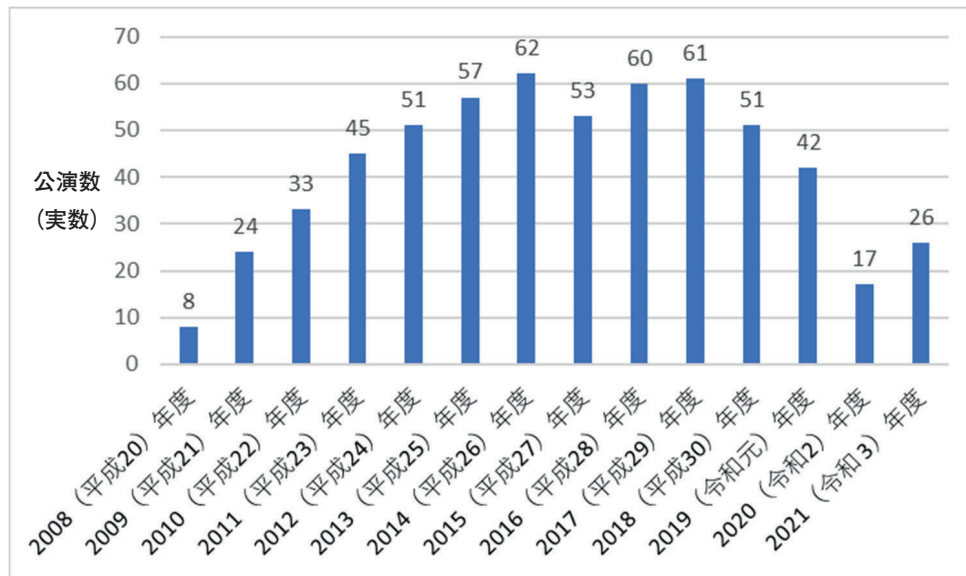


図1. くらしき作陽大学子ども教育学部附属児童文化部ぱれっとの公演数の変遷

移動や準備に負担が伴うが、会場・公演毎の状況や要請に合わせ、実践知・経験知を基に臨機応変に対応し、多様な公演をこなしていく学外公演を重ねていくことにより、参加学生の実践力をより高めるねらいである。このアウトリーチを主体とした活動は、地域の子育て支援への広く細やかで直接的な貢献を可能とした。さらに副次的に、学生の姿を示すことを通して、人間性と実践力の育成を重視する大学・学部の教育の理念や特色を周知することに繋がった。

2008 (平成20) 年度から2021 (令和2) 年度までのぱれっとの公演数の変遷は図1に示す通りである。設立2年目から急激に公演回数が増加し、完成年度を迎えてからは、年間概ね50～60回の公演を保持している。2019 (令和元) 年度末に新型コロナウイルスの世界的流行が始まり公演の実施が困難になるまでこの傾向は続いていた。そして、ぱれっとの公演の学内外の内訳は図2に示すとおり、ぱれっとの605回の公演のうち、学内公演は227回、学外公演は378回であり、公演実績の62%がアウトリーチである。なお、学外公演は、全て学外の子どもに関わる団体・組織からの依頼である。

学内公演 (227回) の中には、ぱれっとが主催する自主公演 (定期公演, 新入

くらしき作陽大学子ども教育学部附属児童文化部ぱれっとの
公演 (605回) の学内・学外の内訳
(2008.8～2022.10)

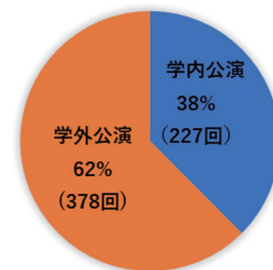


図2. くらしき作陽大学子ども教育学部附属児童文化部ぱれっとの公演の学内・学外の内訳

くらしき作陽大学子ども教育学部附属児童文化部ぱれっとの
公演主催の内訳 (2008.8～2022.10)

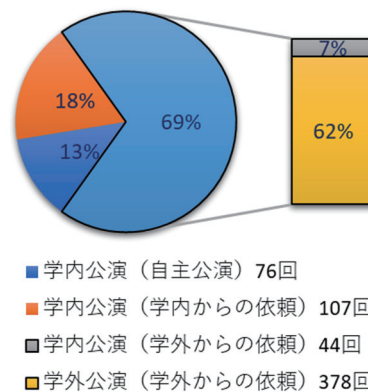


図3. くらしき作陽大学子ども教育学部附属児童文化部ぱれっとの公演主催の内訳

生歓迎公演、新作試演会、他大学児童文化部との交流試演会等76回）や、大学から依頼された上演（オープンキャンパス、大学見学会、キッズキャンパス等107回）のほかにも、学内で実施されているものの、主催（依頼主）は大学関係者でない場合（44公演）がある。その内訳は、特別支援学校や付近の放課後児童クラブなどからの依頼によって学内で実施したもの（20公演）や、大学敷地内にある附属幼年教育施設及び地域子育て支援拠点からの依頼によって実施したもの（24公演）が含まれており、図3に示すとおり、実質的には公演実績の69%にあたる422公演が、子どもに関わる団体・組織からの依頼によるものである。

以上のように、ぱれっとの大きな特徴は、アウトリーチを主体とした公演活動の展開である。学生劇団及び部活動としての自律的な活動や、実践的学習とその評価と反省による深化も、公演数が保証されてこそのものである。全国的にも類例のない高い公演実績がぱれっとの教育を支えている。

V. 今後の課題と展望

本論は、児童文化財の制作と公演を核とした創造的協同活動による保育者・教員養成の教育的妥当性を明らかにする研究の端緒であり、ぱれっとの活動概要と、その変遷から特徴を明らかにした。

今後の課題は、見出された要点・特徴について考察を加え、その有用性や保育者・教員養成のあり方に関する検証・提案を行うことである。例えば、①600回を数える公演の変遷（依頼先・対象年齢の広がり）から見る児童文化財の公演活動に対する社会的意義に関する考察、②ぱれっとによって制作された作品の分析と保育者・教員養成に果たした役割の検証及び協働的創造活動の主題としての児童文化財の意義、③学生劇団及び部活動という学びの共同体による教育の有用性と課題等について論考し、報告を行う。

註

- 1) 山陽新聞、2013年7月26日掲載。

引用参考文献

- くらしき作陽大学・倉敷芸術科学大学COC事務局：文部科学省大学COC（地（知）の拠点）事業平成26年度採択「文化産業都市倉敷の未来を拓く若衆育成と大学連携モデル創出事業」『大学COC事業平成30年度活動報告書』、2019年。
- 佐伯胖：『共感一育ち合う保育のなかで―』、ミネルヴァ書房、2007年。
- 白井良昌・白井徹・竹村直樹：「運動部活動における指導方法についての一考察」、『関西外国語大学研究論集第103号』、2016年。
- 中央教育審議会：『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』、2021年。
- 橋本正巳・永井祐也・銀屋伸之・渡邊亮太・松田真正：「実践的指導力を高める特別支援学校教員養成課程の在り方―特別支援教育ラボの教育実践・地域連携・学術研究の三位一体化―」、『くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要第51巻第2号（通巻第91巻）』、2018年。

